

## A Message from Head Master.

### 国民読書年にあたり



塾長  
河野 誠男 Shigeo Kawano

今年、2010年は国民読書年であることをご存知でしょうか。これは国民の、特に子供たちの文字・活字離れに歯止めをかけようと数年前から政府が準備を進めてきたキャンペーンです。

近年インターネットの普及に反比例するかのよう新聞の購読者数と単行本の販売部数が急激に落ち込んできています。政府のお仕着せ的部分は気になりますが、この読書年を一つのきっかけとして、官民挙げて読書週間の定着を図ることは非常に意義のあることだと思います。

先日の大分合同新聞に現在の子供たちについての特集がありました。その中で「勉強する子、しない子。その差は以前より大きくなった。学校では教科書を開かない、塾にも行かない、家でも勉強をしない、当然宿題はやってこない。無気力・無関心な子供たちが増えてきている」とある中学校教諭の話が紹介されていました。その原因についての分析は記事中にはありませんでしたが、私はその遠因が子供たちの図書離れにあるのではないかと考えています。

無気力・無関心は身近な目標のなさが原因です。遠い夢や近い目標を設定できないためにどうしていいかわからず、ただ無為に毎日を過ごしているのです。しっかりとした目標はしっかりとした考えに裏打ちされます。そしてしっかりとした考えを持つには良質の情報のインプットと、時間をかけた思考の練り上げが必要です。静かな読書時間を確保することでそのすべてが充足されます。テレビやインターネットを通じてのインプットでは能動的に考えるトレーニングにはなりません。

その意味で、現在の子供たちに最も必要な学習スキル、将来目標を持つそれにチャレンジできるかどうかは、小さいころから読書習慣が付けられるかどうかにかかっているといても過言ではありません。大学入試の場合、しっかりとした目標を持っている子供は長期にわたる勉強にも耐え、最初の目標である難関校・難関学部合格していきますが、入試直前までその目標が定まらない生徒は、その逆のパターンをとります。

アカデミーでは3年前から、読書習慣の定着を図ることを目的に小学生向けの「グリムスクール」を、英語既習者特に高校生以上を対象とした「英語ブッククラブ」をそれぞれ開設しています。今年もこのような教室を多くの子供たちが利用されることを期待いたします。

アカデミー通信は次号から内容を一新しお届けします。新しい通信は、お読み頂いている対象の生徒ごとにそれぞれの需要に合った内容を盛り込んで行く予定です。ご期待下さい。

### 2010年は国民読書年

「国民読書年に関する決議」が、平成20年(2008年)6月6日に衆参両院全会一致で採択されました。この国会決議では「文字・活字文化振興法」の制定・施行5周年にあたる2010年を「国民読書年」に制定し、政官民協力のもとで国を挙げてあらゆる努力を重ねることを盛りこんでいます。

#### 「子どもの読書活動推進法」に基づく活動

##### ●学校における読書の充実

朝の読書、読み聞かせ、調べ学習など学校図書館を活用した教育活動を支援する。

読書を通じて心豊かな子どもを育てる「読育」の充実をめざし、新学校図書館図書整備五か年計画の完全実施と、司書教諭の専任化、学校司書の配置を促す。

小学校、中学校、高等学校の教育課程に「読書の時間」「新聞読書の時間」を導入し、児童・生徒の読む力を育てる。

図書館や新聞を活用した授業のできる教師を養成するため、すべての教員養成課程に「読書・新聞読書」(仮称)を創設するよう求める。

##### ●地域における読書の支援

公共図書館の「子どもの本の部屋」を拡充し、児童書の専門司書を配置する。

好きな友達や両親、先生や親戚・知人の誕生日に自分の好きな本を贈る「誕生日に本を贈ろう」キャンペーンを実施する。

「子ども読書の日」(4月23日)に記念事業を企画する。

##### ●新聞に親しむ子どもを育てる

全国の公立小・中・高に学習教材としての複数紙を配備する「新聞読書整備五か年計画」(仮称)を策定し、それに必要な予算措置を求める。

生徒・学生を対象にした「新聞深読み講座」(仮称)を実施し、読書習慣を身につけた生涯読者を育てる。

日本新聞教育文化財団のNIE(Newspaper In Education)活動を支援し、重要な情報媒体である新聞を上手に活用できる子どもを育てる。